

# 記憶廻り



伊藤涼子



父は妖  
20歳の時に  
自殺したらしい



母は人間  
17歳の時に  
僕を生んだ



惨めな化け物



僕は  
普通になりたい

母、梅雨水冬子（つゆみふゆこ）  
父、梅雨水真（つゆみまこと）

真は蛍が生まれて間もない頃に亡くなった。

蛍が真について知っていることは「顔」と  
冬子から聞かされる思い出話の中の出来事だけ。



蛍の父さんはね



勉強も仕事も出来てね  
でも妖だからってくだらない理由で  
自分を責め続けちゃって

鬱みたいになっちゃってね

大変だったよ

私に角だって  
変な力があるって噂が  
全部ひっくるめて  
真くんのすべてを  
愛していたのに

世間の目が邪魔をしたんだよ  
私の親だってそうだった  
だから縁を切ったの

真君を里解でさなひのなら

母は頻繁に父の話をした。

普段は物静かな性格の母だが、父の話をする時だけは違った。

まるで何かに憑りつかれたように話し続ける日もあった。





もつと…  
普通でいいよ



僕…  
何で商品に  
ならなきゃ  
いけないの

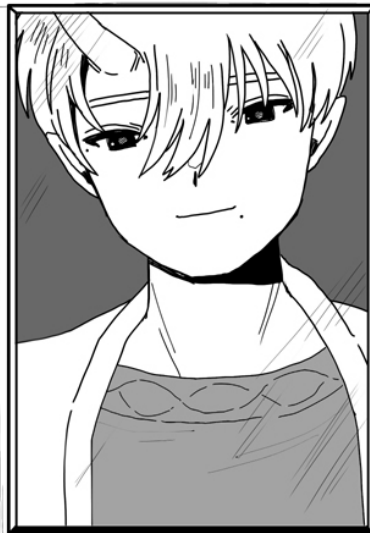


何言ってるの

蛍が立派な  
妖だからでしょ

もつと  
胸を張って  
いいんだよ

真君



蛍が  
一級レベルの  
商品として  
認定されたよ

ホロ...

父が自殺してから  
おかしくなった

真君  
見てる？

真君の優秀な  
血が受け継がれて  
いるんだよ

真君は  
ちゃんと  
生きてるんだ

母は多分

真君  
言ってたよね  
誰も認めてくれない  
って……

ちゃんと…  
認めてくれる  
人たちが  
いるんだよ




母は人間から認められることに対して異常に固執していた。

この日から父の写真に話しかける頻度が上がった。毎朝、毎晩。


家にいる間ずっと写真の中の「真君」と会話した。

この時、多分母はもう手遅れだった。



痛い検査かも  
しれないけど  
頑張ってるね

辛いときは  
楽しかったことを  
思い浮かべて




楽しかったことなんて  
ゆきむらくと  
遊んでた時期ぐらいしか  
思い浮かばないな


いつぱい  
咲いてたい

ふふ

懐かしい



ゆきむらくん



元気かな

蛍を量産するための検査が始まる。

蛍は冬子から言われた通り、  
苦痛を感じる度に  
楽しかった頃を思い出していたようだ。

なんで蛍がこんな痛い思いを  
しなきゃいけないんだ。

見ているだけでも辛い。  
変わってやれたらよかったのに。

人間に  
生まれ変わりたいな



あーあ

そしたら

ゆきむらくんと  
いろんなことを  
一緒に…



辛い日が続いた。

毎日

人間に生まれ変わる想像をした。

人間になったら

雪村君と同じ学校に通って

夏休みには雪村君みたいに

思い切って髪を切ってみよう。

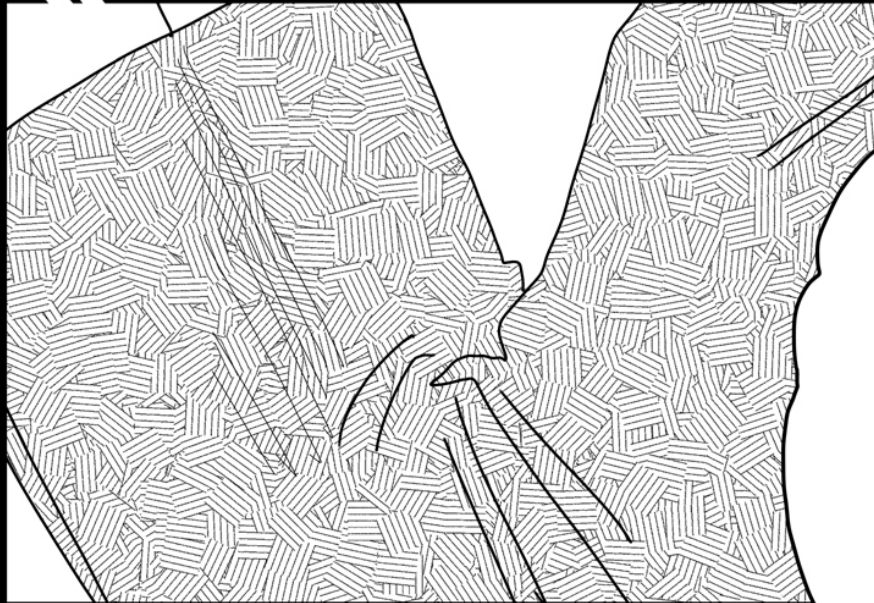
人間になったら

きっと世界が変わる。



いつか  
会えるかな

いや



会うんだ

そして  
楽しいこと  
沢山話そう

ゴ


ゴ

ゴ

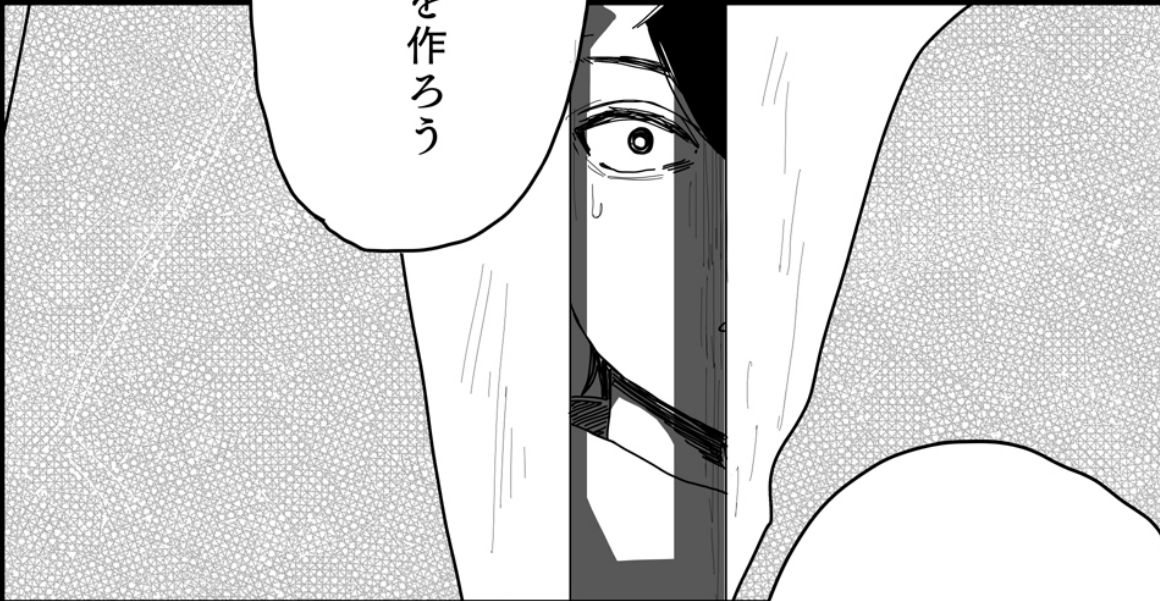
いつか

雪村君と会う


これだけが生きる希望だった



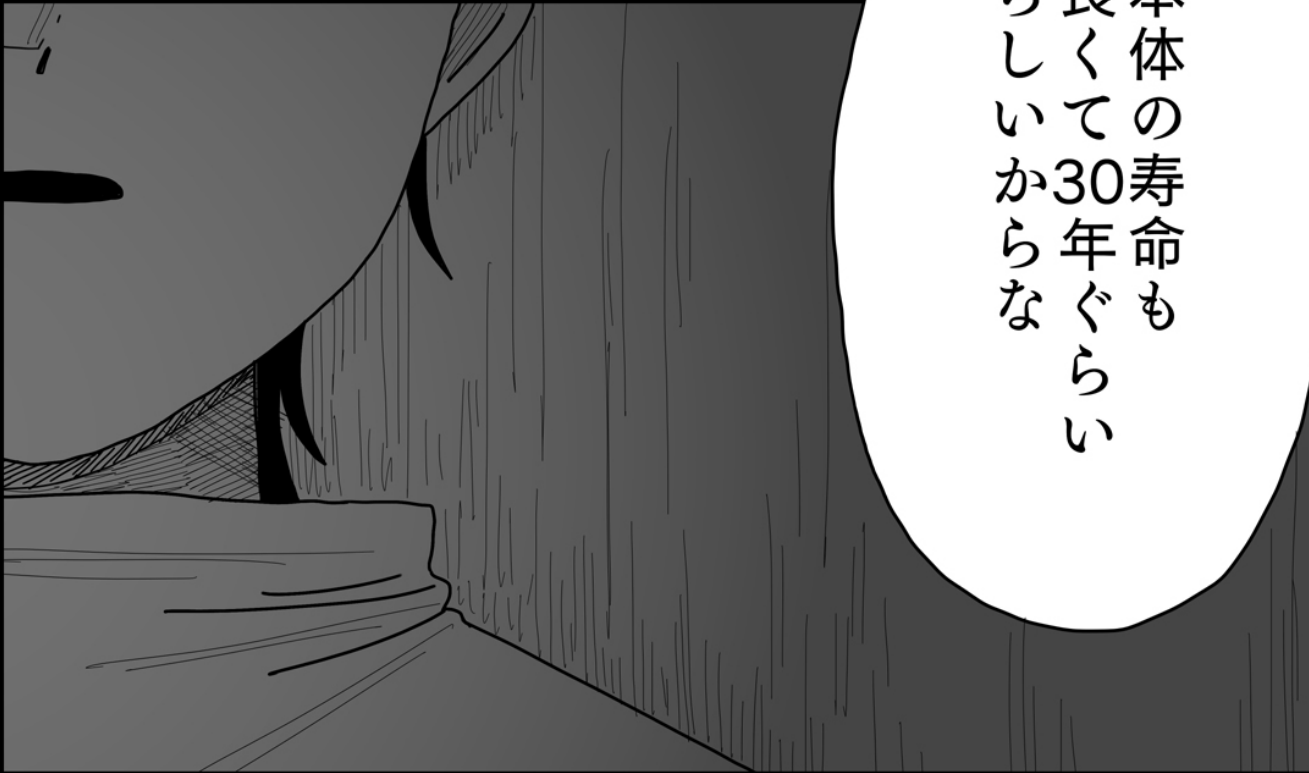
コピーが  
完成した



ただちに次を作ろう



あれが  
僕の…



本体の寿命も  
長くて30年ぐら  
いらしいからな




妖の命は長く持たないらしい。

何を夢見ていたのか。

人間と同じように遠くの将来を想像することすら僕らには贅沢なことだった。

元は人間じゃない、ただの化け物なんだ。  
仕方ない。

最初はそう思った。



人に貶され

体を売って

使い捨てられる

今まで

我慢してきた結果が  
これか………



痛くて辛い日が続くある日、  
突然何もかもが馬鹿らしくなった。

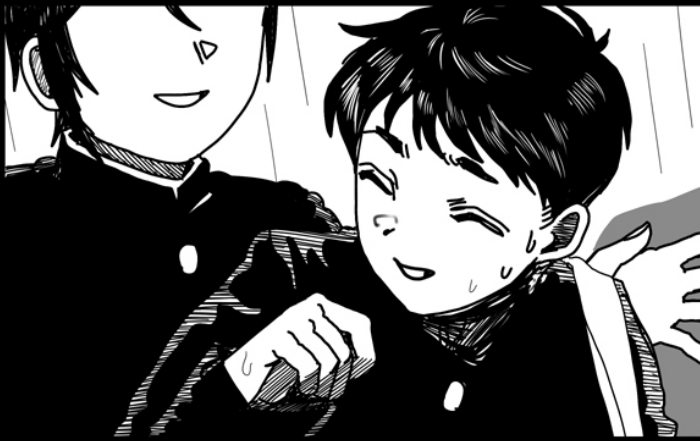
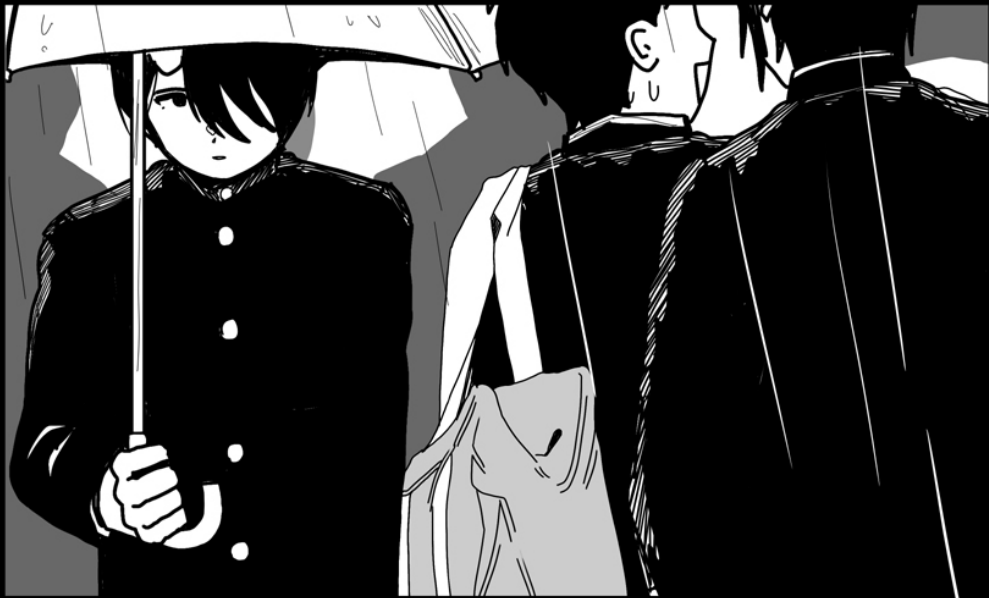
そして

考えるようになった。

僕が突然

自分勝手になって

今ある願望を叶えるためだけに  
生きたらどうなるだろう。



母さん  
一生のお願い



僕ね

行きたい学校が  
あるんだけど…